

陸游の卜算子「詠梅」

報告：花岡風子

今日のお題は南宋の詩人、陸游^{ぼくさんし えい}の〔卜算子〕^{はい}〈詠梅〉でした。こころ新たに令和を迎えた今の日本人にとって、梅の歌といえば、『万葉集』が思い浮かびますが、これは万葉の時代から更にずっと下って、今から 800 年ほど前に作られた作品です。梅はまだ雪の残る寒い時期に、どの花よりも早く花を咲かせます。中国人は古代からそんな梅を愛でてきたのですが、陸游もまた、とりわけ梅を愛したようです。梅を題材にした数ある陸游の作品の中にあって、その不屈の人生を下敷きにしたこの作品は、この詩人の真骨頂といえるものだそうです。

陸游は、1125 年生まれ。85 年の生涯にほぼ一万首の作品を残し、南宋第一の詩人と言われます。彼はまた気骨のある抗戦派の愛国詩人としても知られています。地方官で徹底抗戦派の父陸宰^{さい}が、家族と共に転勤のため淮河^{わい が}を航行している途中、舟の上で生まれたそうです。「この人はね、北宋の首都汴梁^{べんりょう}（今の開封）が女真族の金によって陥落する前に、嵐の中で生まれたんですよ。その翌年、北宋は滅亡しています。生まれからして象徴的ですね。」と植田先生。

父が論じた主戦論を聞いて育ち、自らも強い愛国心と対金強硬論を貫いた人生でした。29 歳のとき、科挙の第一段階の試験^{しんかい しんけん}にトップ合格したものの、これが運悪く権力者秦檜^{しんけん}の孫秦埴^{しんけん}よりも上位であったため、秦檜の横やりで落第の憂き目にあいます。つまり、これでエリートとしての出世の道を閉ざされてしまったのです。これを転機として陸游の苦難の道が始まるわけです。

さて〔卜算子〕^{ぼくさんし}と言うのは、楽曲の名称で、一般に〈詞牌〉^{ツープイ}と呼ばれるものです。「詠梅」は、

歌詞の内容です。「卜」も「算」も占いという意味ですが、元になった曲がその様な内容のものだったとも言われています。つまり旋律の題が〔卜算子〕というわけです。したがって楽曲の名称自体はこの作品の内容とは特に関係ありません。〔卜算子〕に限らず、各〈詞牌〉にはそれぞれ字数と平仄が決まっており、このルールに沿って沢山の作者により様々な内容の歌詞が作られています。

有名なところでは、毛沢東もこの〔卜算子〕「詠梅」を下敷きに一首呼んでいます。毛沢東は、文化大革命を起こす前、政治家として事実上の引退を迫られていた時期に、陸游のこの作品に自分の境遇を重ね合わせて奮起したわけですが、文革もさることながら、詩のレベルも、やはり陸游の詩には及ばないようです。

〈詞〉は前半と後半に分かれます。これが一般的なスタイルです。〔卜算子〕は前半も後半も以下のような平仄になります。

○の部分の平仄は自由です。陸游のこの作品も以下の平仄にピッタリ符合しています。

○仄仄平平

○仄平平仄

○仄平平仄仄平

○仄平平仄

bǔ suàn zǐ
〔卜算子〕yǒng méi
詠梅lù yóu
陆游yì wài duàn qiáo biān
驿外断桥边
jì mò kāi wú zhǔ
寂寞开无主

yǐ shì huáng hūn dú zì chóu
 已 是 黄 昏 独 自 愁
 gèng zhuó fēng hé yǔ
 更 著 风 和 雨
 wú yì kǔ zhēng chūn
 无 意 苦 争 春
 yī rèn qún fāng dù
 一 任 群 芳 妒
 líng luò chéng ní niǎn zuò chén
 零 落 成 泥 碾 作 尘
 zhǐ yǒu xiāng rú gù
 只 有 香 如 故

〈詞〉は前半と後半に分かれますので、意味もそれに合わせてみていきましょう。「詠梅」つまり梅を詠むという、この作品の内容を示す表題が副題としてついていますが、詩の中には梅の字は全く使われていません。まず、「驛」（駅）とは、政府機関の公文書を届ける馬と役人が休憩する駅舎のことです。その駅舎の向こうに壊れた橋があり、主のない梅の花が寂しそうに咲いている。すでに黄昏時で、それだけで心細いのさらに、雨が降り、風が吹いてきた。「无主」、つまり「主がない」とは、手入れする人がいないとも取れるし、愛でる人がいないとも言えるかもしれません。とにかく、夕暮れの風雨中、寂しげに花を咲かせた一株の梅の古木が鮮烈に浮かびあがります。

後半です。我こそは、と様々な花が咲き誇るのが春の景色というものだ。そんな春の花々が、真っ先に咲く梅を妬ましく思っている、放っておけばいい。春の花が咲く頃、梅の花は落ち、泥にまみれ、踏みつけられて塵になる。しかしそうなったとしても、香りだけは依然として残るのだ。後半の二句「零落、成泥、碾（踏まれて砕け）作塵（チリになる）」と時系列で花が土に還っていくまでの表現は実に生々しいですね。この表現に陸游が時の権力者から受け入れられずに、孤独の末、あちこち左遷させられる自分の境遇を重ねていると思うと、その感情は真に迫るものがあります。

そして最後は、どんなに踏みつけられ、たとえ我が身は塵と消えても、自分の誇りや信条、夢や希望は、梅の香りのように残るのだ！という陸游の雄叫びが聞こえてきます。

このように植田先生から作者の人生物語と詩の内容を解説いただいてから、読みの練習に入りました。最初は全体で音読してから一人一行ずつ、次に前半4行、後半4行と植田先生が参加者を指名していかれます。毎回たっぷり音読時間も取ってくださるこのクラスは、数ある漢詩講座の中でも、一人一人の参加意識が高まる講座ではないかと思えます。

さて、〈詞〉は宋の時代には、もちろん歌だったわけですが、今となっては現代中国語の声調で読むしかありません。「5文字の句と7文字の句がありますので、こういうのを長短句とも言うのですが、なんとなくもの悲しげなムードを出しますね。」と植田先生。「宋の時代は、どういう音色でどういう歌い方で、どんな風にこぶしを効かせたのかは、滅びてしまって伝わっていないんですよ。楽譜は部分的に残ってはいるものの当時の歌い方が分からない。今では現代風にアレンジした曲が何種類かCDとして市販されているようですが。中国は王朝交替があり、また異民族の支配もあつたりするので、意外と伝統が受け継がれにくいのです。それをうまーく残すのが日本ですね。楽譜も中国では失われたものが、日本に残っている場合もあります。但し〈詞〉というこのジャンルは、日本ではあまり普及しませんでした……」。

確かに、王朝が代わると、次の権力者に都合の良いように歴史は書き換えられ、前の王朝の文化も受け継がれにくいのでしょうか。植田先生は常々、「日本は中国文化の冷凍庫である」と仰いますが、古いものを大切に受け継ぐという精神性は日本人の良いところであり、日本という土壌が果たしてきた役目でもあったように思い

ます。

私自身は中国人には、前に突き進んでいくエネルギーを感じますが、新しいものを創造したり、誰も歩いたことのない茨の道を開拓するには、それと同じくらい古いものを破壊していくパワーも必要なのかもしれないのかな、と感じることもあります。文化大革命などはその一例かも知れません。

中国を破壊と創造のエネルギーとすると、日本は保存と改良・改善のエネルギー。日本人と中国人の根本的な性質は相互補完関係にあつて、私個人としてはベストパートナーだと思っています。今後優秀な中国人に仕事を奪われる、という危惧もあるようですが、日本人は日本人の良さを自覚し、上手く中国人と仲良くしていけば良いと考えています。

さて、話は漢詩から逸れましたが、講座の最後に、陸游の絶筆として知られる「示児」という詩も教えていただきました。陸游が亡くなる前に息子たちを呼び寄せて遺言とした七言絶句の詩です。

shì ér
示 兒
sǐ qù yuán zhī wàn shì kōng
死 去 元 知 万 事 空 ，
dàn bēi bú jiàn jiǔ zhōu tóng 。
但 悲 不 見 九 州 同 。
wáng shī běi dìng zhōng yuán rì
王 師 北 定 中 原 日 ，
jiā jì wú wàng gào nǎi wēng 。
家 祭 无 忘 告 乃 翁 。

意味はこうです。「死んだら、何も亡くなるということは分かっている。しかし、もし自分が死んだ後、金に占領された北方領土が奪還できたら、わが家の霊祭の折に必ず報告して欲しい」というものです。

「陸游の執念がこもっていますね。私もこんなこと言って死にたいですね（笑）」と植田先生。この詩からは堅物の官僚みたいな雰囲気伝わ

りますが、陸游はまた繊細な心を持つ人でもありました。彼の有名な〈詞〉の一つに、別れた愛妻を懐かしんだ作品があり、これも素敵な作品です。陸游は母方の従姉妹に当たる唐婉とうえんという女性と結婚しますが、この妻と大変仲が良かったそうです。しかし、彼女が子を生まないこと、彼女と結婚したあと家に不幸が続くと占い師に言われたという理由で、二人は離婚させられるのです。本当の理由は諸説があつてはっきりしませんが、いずれにしろ、昔は姑の力が絶大だったようです。「陸游はマザコンだったんですかねえ。奥さんのことが好きで仕方なかったのに、お母さんと嫁の仲が悪くて別れさせられたんですね。でもこれは封建時代には当たり前のことだったのかも知れません。家風に合わないという理由で離縁される、私も子供時代にこの類の話は何度か聞いたことがあります」と植田先生。

お互い別の人と結婚してからも陸游はずっと元の妻を忘れられませんでした。そして、元の妻唐婉とうえんと偶然に再会した時に詠んだ〈詞〉が残っています。〈詞牌〉の名は〔釵頭鳳〕。再会后間もなく、唐婉は病気で亡くなってしまふのですが、死ぬ前に同じ詞牌名の作品を作ってこれに唱和しています。私もこの二人の作品を読みましたが、綿々とした二人の愛が伝わってき切ないほどです。なお、この二人の悲恋物語は今では各種の芝居の演目にもなっています。芝居の場面には必ずこの歌が出てきますが、曲調はすべて演目に合わせてアレンジしたもので、もとの曲ではありません。

男性らしい、気骨の人と言われる陸游のまた別の一面ですね。天を仰いで嘆息する武人の後ろ姿が見えるようです。人間というのは実に様々な面があり、一人一人の心の奥には、他者には到底わからない人生があるんだなあ、と思ったのでした。